
エデンの林檎

阿諏薫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エデンの林檎

【Nコード】

N7860V

【作者名】

阿諏薫

【あらすじ】

何をしてもさせても駄目な少女、三峰朱里。

自分を過大評価も過小評価もしない彼女がある日突然、気付けば知らない場所にいた。

そこで出会ったのは、烏の濡れ羽色を身に纏う、一人の美丈夫――。

つまるところ、異世界トリップファンタジー。

空が赤く染まる。

——ああ、夕方か。

西日の射した校舎の窓をじっとみつめた。

既に廊下に他の生徒の姿はなく、自分だけがそこにいた。まるで、自分だけが世界から取り残されたようだった。

——とは、全く思わないが。

流石そこまで思考は幼くはないし、ましてや厨二病を患っている訳ではない。

ただ、人より少し、性格が暗いというだけだ。

はつきりと物事を言うのが苦手だし、成績がいい訳でもない。悪い訳でもないが。

運動なんかもってのほかだし、総合的に見るならば、平々凡々より少しばかり劣っていると思う。

容姿の問題で言えば、黒髪のストレートで、長さは腰まで。

前髪はぱつつんでそろえられているが、目元は隠されている。

唯一自慢できるのはきつと、痛んでいないこの髪と、日焼けしない真白い肌だけだとおもう。

体型は食べても太らないのではなく、食べられなくて太らない。

肉類は嫌いだし、菜食主義にちかい食事ばかりとっている。

身長が163cmに対して、体重は43kgとやせ細っているし。

この体型も、ある種のコンプレックスではあった。

私——三峰 朱里にとっては。

夕方の誰もいない校舎の廊下で、徐々に落ちていく夕日をじっと見つめていた。

これは今日に限った事ではなく、日々の繰り返しの一部に過ぎない。毎回放課後に何か頼まれ事を受けて居残ったり。

例えば掃除当番だったり、プリントの整理だったり、色々だ。

決してそれらがイヤな訳ではないし、むしろ私が出来る数少ない、こと、だから自ら進んで引き受ける。

——今日も、そうだった。

ただ、ひとつだけ繰り返される日常と異なることが、今日に限って起こった。

「……え…?」

ぐらり、と校舎が揺れた。

まるで世界が湾曲しているかのような、それぐらい大きなゆがみだった。

地震!？と思って窓枠にしがみついても、揺れているのは校舎だけ――

否、私がいる、この廊下だけ、だった。

校舎も揺れていない。

なぜか、なぜか私が立っている廊下だけが激しく歪んでいるのだ。

ぐわんぐわんと大きく波打つ廊下に、ついに立っていられなくなつた私は、膝から崩れ落ちた。

膝が廊下につく、その瞬間。

ひととき大きく、廊下が跳ねた。

そしてまるで私を飲み込むかのように、廊下が覆い被さってきたのだ。

暗転暗転。私の意識はそこで途絶えた。

ざわざわと音がする。

それは葉と葉が重なって鳴るような、耳を澄ませば聞こえるような、その位小さなものではあったが。

すこし、肌寒かった。

風が吹いているという事は、自分は外にいるのだろう。

ゆっくりと瞼を上げてあたりを確認するように目を動かせば、確かに自分は外にいた。

見上げた先には星一つない暗闇。だけど周りには木があって、すこしばかりの明かりもあった。

何が光っているのか、と顔を横にずらして光源を探せば、木の根元から生えている青紫色の花が、光っているようだった。

見た事のない花に僅かばかり目を見開いたが、その光はどこか、温かかった。

「——ここ、どこだろう…」

呟いた言葉は、まるで自分の声ではないと錯覚してしまうほどには、かすれていて、低かった。

そういえば、喉が痛い。

ゆっくりと腕を持ち上げて、喉をさする。

そのあと、体を起こして、周囲を見渡した。

どうやら、全く見覚えのない場所にいるようだった。

「本当に、ここ、どこ——？」

暗闇の中、僅かばかりの光しかなく、ましてや自分はひとりぼっち。

思わずなきそうになるくらいには、心細いと感じていた。

――だけど。

「そこに、だれかいるのか。」

しん、と空気が震えた。

低く、それでいて通る声は、はつきりと朱里の耳に届いた。

「だれか、いるの？」

朱里も、同じく問い返した。

すると、ゆっくりと声の主が朱里の下へとやってきた。

漆黒のマントとゆったりとした裾の長い巻スカートのようなものが見えた。

現れた男は、まるでこの世のものとは思えないほどに顔が整っていた。

すらりとした高い鼻。ほりの深い顔立ち。きりつとしたややつり目気味の目。

少しばかり薄いが、形の良い唇。肌の色は、褐色。

緩やかにウェーブのかかった髪は肩甲骨したほどまで伸びており、色はまた漆黒だった。

全身に黒を纏った美丈夫が、そこにいた。

「……黒、だと？」

低いバリトンだが、はっきりと目の前の男は朱里を見下ろしながらそう呟いた。

黒。確かに、朱里の髪は黒だ。日本人なら当然の色だ。何をそう疑問に思う事があるのか。朱里は緩く首を傾げた。

「あなたも、黒ね」

朱里は男の目を見ながら、そう答えた。

どこか非現実的な男の容貌に夢現な気分で居たのかもしれない。普段の自分であれば、そんな不用意な事は口にしなかった。

もしかしたら、ただ寂しくてつい口を開いてしまっただけなのかもしれないけれど。

朱里がそういうと、男は緩く目を開き、その後草むらに座ったままの朱里と視線を合わせるように、ゆっくりと腰を下ろした。

「お前は、どこからきた？」

男の問いに、朱里はさらっと東京の、板橋区。と答えた。

男は朱里の問いに首を傾げ、トウキョウノ、イタバシク？と片言の鸚鵡返しをするだけだった。

そんな男に逆に朱里が驚いた。

しらないの？とつい口に出して聞いてしまった。

男は、首を横に振った。

「それは、一体どこにある。」

「日本の首都の…」

「ニホンノシュト？……我が国では、そんな珍妙な場所はない。」

はて。珍妙、とは。

朱里は首を傾げた。ならここは一体どこだというのか。

「じゃあ、ここは、どこ？」

「ここはヘギラス——この世界の名であり、この国の名でもある。」
「ヘギ、ラス——？」

——そんな国、聞いた事ない。

朱里はぐるぐる頭の中で考える。

もしかして、聞いた事ないだけで実際に地球上に存在する国の名前かもしれない、と。

だが、目の前の男は国の名前であって、世界の名前でもあるといった。

世界——。それは、一体どのようなカテゴリーとして捕えれば良いのだろうか。

いっそもう、私は違う世界に来たのよとまるで小説のような事を考えれば良いのか。

わからない。なにも、わからない。

気付けばここにいて。

学校なんか23区内なのだから近隣に森？林？なんてものは絶対にないし、かといって誰かに運ばれたとしても、何故ここに放置されたのかもわからない。

わからない事だらけだ、と朱里はため息を一つ、ついた。

「おまえ、落とし子か。」

混乱する朱里に、男はほぼそうであろうと検討つけたような意思を込めつつそういった。

「落とし、子？」

「まれに、数百年に一度の単位で現れる、この世界とは異なる世界からやってくる者の事だ」

この世界とは異なる世界、と、目の前の男ははっきりとそういった。

「べ、つの、世界…」

「そうだ。お前の言う、ニホンノシュトとやらも、トウキョウノイ
タバシクとやらも聞いた事はない。ましてやこのヘギラスは1国1
城。ヘギラス以外に分別された固有名詞のつく場所はない。」

男の言葉が、朱里にこれは現実なのだ突き付けるかのように、や
けにはつきりと聞こえた。

男の言うように、ここが別の世界だとして。

仮に、仮に、だ。

別の世界だとして、一体なぜ自分はここにいるのだろうか。

ああ、それよりも。

私は一体、どうすれば――。

まるでそんな朱里の思考をぶった切るかのように、いきなり男は朱里
をぐっと持ち上げた。

「えっ――」

「希少な黒を持つ者。名を、なんと言う。」

男の鼻先と、朱里の鼻先がくつついた。

それほど、互いの顔が近づいていた。

「あ、あか、り…三峰、朱里…」

「アカリ…が名か？」

「そう、朱里が、名前で、三峰は、名字…あと、あかり、のイント
ネーションがおかしい」

「そうか。」

男はそういうと、少し朱里から顔を離し、抱きかかえる朱里の体勢を変えた。

己の腕の上に、朱里を撓らせるような形で抱え上げたのだ。

そもそも、まるで小学生と大人ほどに体格差のある男と朱里。

腕に載せるように抱えられても、違和感はない。

「我が名は、シュヘンベルク。アーノルド・レヴィ・シュヘンベルクだ。」

「長いね…えっと、じゃあ、アーシュ。アーシュって呼んでも、良い？」

「……ああ。あかり、ならいい」

「えっと、ありがとう？あと、イントネーション、今度はあってる。」

前髪で目元は隠れていて見えないが、口元だけで緩く笑みを浮かべれば、シュヘンベルクも緩く口角を上げて、笑みを浮かべた。

「…あかり。我とともに来い。」

そういうと同時に、シュヘンベルクの背からばさり、と漆黒の翼が現れた。

そして、朱里を抱きかかえたまま、ゆっくりと浮かび上がる。

「えっ、えっ!？」

「…何を驚く？」

「そ、空飛んでる…どうして？」

「有翼魔族は皆飛ぶぞ。」

「ま、魔族？」

まるで本当にファンタジーの世界だ。と朱里は思った。

空を飛び、魔族がいる。

第一、違う世界にきたという自分はトリップしてきた事になる。どこぞのファンタジー小説だと頭の隅で思いながら、朱里はぎゅうっとシュヘンベルクの首に腕を回した。

「アーシュは、有翼魔族ってことなの？」

風圧で朱里の髪がふわっと浮かぶ。

前髪も風圧によって額が全開になるほど持ち上がった。現れた朱里の大きな瞳。

漆黒のその瞳に、シュヘンベルクは写っていた。

その反射するほどの美しさに、一瞬気を取られたシュヘンベルクだが、朱里の問いに、否、と答えた。

「我は全であり、無である。」

「どういうこと？」

「――有翼という種に固定されず、全ての種であり、またその全ての種のどれでもない。」

「…難しい…」

「この世界を統べる唯一絶対の種である、と言えばわかりやすいだろうか」

「なにそれ。まるで魔王さまって感じだね」

「ああ、まさしくそれだ。」

冗談のように言った朱里の言葉に、是と頷いたシュヘンベルク。

――いやまさか冗談だろう。いくらファンタジーな世界で、魔族がいるからって、そんな。

本当に？と恐る恐る問えば、一瞬きょとん、とした表情を浮かべた後、シュヘンベルクはふっと笑った。

「我が、この世界の王だからな。」

——嗚呼！私やっぱり厨二病患っていたのかもしれない！

2-1

朱里はシュヘンベルクに抱かれたまま、星も雲もない、只一つ浮かぶ月だけがある空を飛んでいた。

しばらくしてシュヘンベルクが降り立ったのは、とてつもなく大きな、元居た世界で言うところの中世ヨーロッパに出てくる城の、バルコニーだった。

「大きな城ね…」

「そうか？」

「うん。私が元居たところでは、こんなに大きな城はなかった。」

第一、城違いだと思う。

日本の古来の建築様式で建てられた城は、ヨーロッパ諸国らの城とは全くの別物だ。

だがあれらも、また城なのだ。

「…なんだかこうしていると、アーシュは本当に王様にみえるね」

シュヘンベルクの立ち振る舞いや雰囲気、纏う空気が、この城とかけ込むかのような、否、この城がシュヘンベルクの為だけにあるようだった。

そういうものをどこか、感じさせた。

「…あかり。外は冷える。中へ入るぞ。」

そういつてそっと背を押されるようにしてバルコニーから部屋へと足を踏み入れた。

瞬間。

「お帰りなさいませ魔王さま！……！！」

黄緑色の頭が、見えた。

「…………五月蠅い、サーシエス」

「申し訳ございません！ですが執務室におられるはずの魔王さまの姿がなかったものですから……、なぜ、ヒト科の生き物がおるのです」

サーシエスと呼ばれた男はひたすらに頭を下げ、片膝を突いた状態だったが、突然、ぱっと顔を上げた。

そうして、朱里と視線が交わる。

「な…っ！なぜヒト科の生き物が高貴な、黒、を…っ！」

サーシエスの言葉に、朱里は首を傾げる。

どういふことなのだとしユヘンベルクのマントをくいと軽く引けば、シユヘンベルクは柔らかな眼差しで朱里を見つめた後、くしゃり、とその小さな頭を撫でた。

「サーシエス。あかりは落とし子だ。故に、元いた世界で黒を纏う種族の出であったとしても、不思議ではない。」

「お、落とし子…！？このヒト科の生き物がですか…！？」

「ああ。」

「そ、そんな…」

なにやら愕然とした様子のサーシエスを、朱里は只じっと見つめていた。

サーシエスの容姿も又、整い過ぎていた。

黄緑色の髪は分け目を中心に前髪ごと左右ばつさりと切りそろえられ、後ろをポニーテールにしている。

右目には眼帯。左目は薄紫色をしたすこし垂れ気味の二重。

白いスーツを身に纏い、手には同じく白い手袋をはめていた。

「わ、私は認めません！ 幾ら落とし子で黒を身に纏っていても！ コレはヒト科ではありませんか！ 我ら高等魔族の奴隷か食用ではない存在ですよ！ そんな存在に……っ」

サーシエスはキッと朱里を睨みつけた。

「我が王の妃になる資格等、ございません！……！！！！！！」

——ちよつとまで。

と朱里は思った。一体今なんと言ったのかと。

「…ヒト科…ってひとがここにもいるのね…」

「? ああ。魔族とヒトの2種だな」

朱里の呟きに、シュヘンベルクはさりと答える。

そういうことは、初めに言えと内心思いつつも、朱里はぐっところえた。

「…でも、アーシュ。この人は、ヒトに奴隷か食用としか価値がないって…」

「——確かに。そうヒトを認識し、そう扱う者は多い。だが、あくまでその思考は上流階級の高等魔族だけであり、城下にすむ下等魔族はヒトと上手く共存している。」

まあ、見かけだけの共存ではあるが、とその後小さく呟いてシュヘンベルクは答えた。

朱里はそう…、とだけ答えると、ゆつくりとシュヘンベルクを見上げた。

「じゃあ、わたし、アーシュの奴隷になるの? それとも、アーシュは私を食べるの?」

そう答えた朱里の表情には、怯え等は一切なかった。

只純粹に、まるで気にもしていないようにシュヘンベルクに問う。

逆にその姿に、シュヘンベルクとサーシエスが驚いた。

「…否。我はあかりを奴隷として扱う事も、ましてや食すこともしない。――別の意味では今後あり得るだろうが。」

「? そうなんだ」

「――ああ、あかりの準備等が整ったら。そのときは：「私は認めませんよ魔王さま!!」：五月蠅いぞサーシエス。貴様は女か。喧しい。キャンキャン吠えるな。」

「吠えて等おりません!!!!!!」

朱里との会話を遮ってきたサーシエスに、苛立ちをあらわにするシュヘンベルク。

朱里はと言えば、シュヘンベルクの言った言葉の8割は理解できていなかった。

別の意味って何だ? 準備? とぐるぐる考え込む。

が、わからないものはわからないので、直ぐに考えるのをやめた。

サーシエスはそんな朱里を鋭く睨みつけると、貴様なんぞ、魔王さまにふさわしくない!! と怒鳴りつけた。

「……私は、自分が特に秀でたものがない事も、自分の容姿も、理解している。アーシュは優しいから、私を見捨てられなかったただけだって言う事も、知っているよ」

ぽつり、と呟くように、だがはっきりと答えた朱里に、サーシエスは目を見開いた。

だがすぐにまた鋭く朱里を睨みつける。

「我が王の名を馴れ馴れしく呼ぶな!!」

サーシエスがそう叫んだ瞬間、部屋の空気が変わる。

ずん、とまるでこの部屋だけの重力が変わったかの様な重みに、朱里はぺたりと床に座り込んでしまった。

「――貴様に、何の権限があつてそこまで言う？」

低く、まるで地を這うかのような重低音。

果たしてこの人は、先ほどまで柔らかなトーンで話しかけてくれていた人なのだろうか、と疑問に思うほど、シュヘンベルクの無機質な声が部屋に響いた。

「我の名を何の苦もなく呼べる、それが一体何を表すのかわからないほど貴様は無知だったか？サーシェス」

「……っいいえ、我が王……」

「そうだな、あかりに呼ぶ事を許したのだから、特別に貴様にも呼ぶ事を許そう。――一文字でも呼べるのならばな」

「わ、我が王……っ！」

部屋全体にかかっていた圧力は、シュヘンベルクの前に立つサーシェスにのみ更に重くのしかかっているようだった。

サーシェスの体はがたと震え、膝はがくがくとして今にも崩れ落ちそうなほどだった。

だがそれでもなお、シュヘンベルクはその威圧を解く事はなかった。

「――アーシュ。」

――朱里が、声をかけるまでは。

2-3

「アーシュ、」

朱里が呼ぶと、少し困ったような表情を浮かべながらシュヘンベルクは振り返った。

と、同時に今まであった威圧感がふっと消えた。

「あかり」

「アーシュ、それはいじめだと思う」

「…だが、コイツの吐いた言葉は暴言だ。あかりをひどく侮辱した言葉だ。」

「うん。でも、それはアーシュを思っただけの言葉でしょ？アーシュが大切だから、魔族じゃない私を警戒するのも当然の事でしょう。だから、その人を責めるのはお門違いってやつじゃない？」

朱里の言葉に、青ざめていたサーシェスは目を見開いた。

何言ってるんだコイツというような表情だ。

朱里はちらりとサーシェスをみやると、直ぐに視線をシュヘンベルクに戻した。

シュヘンベルクは未だ納得がいかないような、苦虫をかみつぶしたような表情をしている。

朱里はため息をついた。

「アーシュはこの世界の王様で、魔王さまなんでしょう？」

「ああ」

「そんな人の傍に、いきなり見知らぬ人がいたらそれは誰だって普通警戒するわ。もしかして危害を加えようとしてるんじゃないかとか、刺客なんじゃないかとか。そういうことって絶対誰でも考える

よ。それが、アーシュを大切に思っただけに居る人なら余計にね。」

「…………ああ」

「だから、アーシュは怒るんじゃないじゃなくて感謝していいくらいじゃない？それに私、気にしていないし。」

正直に言うなら、そんな事言われても何とも思わないしどうでも良いのよ。と言う朱里に、シュヘンベルクもサーシエスも言葉に詰まる。

確かに、サーシエスのとった行動は魔王側近としての立場であれば当然の事。

だが、そこに私情も含まれていたからシュヘンベルクとて怒りがわいたのだ。
だのに。

目の前にいる少女は気にした風もなくさもそう思われて、そういわれて当然だと言う。

シュヘンベルクはそつと朱里に腕を伸ばし、細すぎるその体を引き寄せた。

「…アーシュ？」

まるで割れ物に触れるかのようにそつと朱里を抱きしめるシュヘンベルクに、朱里はわけがわからず首を傾げたが、シュヘンベルクはこたえない。

それどころか、身動きする朱里を咎めるかのように抱きしめる腕に少しばかり力を込めて、朱里を更に抱き寄せた。

今までどんな魔族の女を宛てがっても、決して体を触れさせるような事はしなかったシュヘンベルク。

そんな彼の姿を目の当たりにして、サーシエスは開いた口が塞がらないでいた。

シュヘンベルクは、既に千をゆうに越える年数を生きてきた。
シュヘンベルク以外に、それほど長く生きている魔族はいない。

第一、魔族の寿命は長くて500年ほどだ。

代々かかっている歴史書に落とし子の記述はあるものの、シュヘンベルクが生きてきた千数百年の間には一度もその存在は確認されていない。

だから魔族達は皆、落とし子など伝説上の存在だと思っていた。

正直、シュヘンベルクもまた、朱里と出会うまでは落とし子の存在は伝説上のものだと思っていた。

だけれどもたしかに、落とし子は存在していた。

でなければシュヘンベルクは産まれてこなかった。

――そもそも落とし子とは何なのか。

それは、代々の魔王の花嫁となる存在。

突如異なる世界より現れて、そして必ず魔王と落とし子は惹かれ合う。

例え落とし子が落ちた場所が魔王から遠く離れた場所でも、必ず2人は出会う。

そうして出会って恋をして、唯一落とし子だけが次代の魔王を産む事が出来るのだ。

他の魔族では絶対に魔王の子を産む事は出来ない。

魔王の子は毎回男児であったし、落とし子もまた毎回女児であった。つまりシュヘンベルクは、先代の魔王と先代の落とし子との間に産まれた子。

ただ、何故シュヘンベルクも落とし子を伝説上の存在だと思っていたか。

落とし子というのは、魔王の子を成し、産む事の為だけに存在する

と言っても過言ではない。

多大な魔力を有して産まれてくる子があまりに多く、またその為
体への負担が大き過ぎて耐えきれず、死してしまう落とし子が多い
のだ。

シュヘンベルクの母であつた落とし子もまた、耐えきれず死してし
まった者の一人だ。

だからシュヘンベルクは母親というものも、落とし子というものも
知らないのだ。

ただ、その存在だけは伝えられて。

そうして気が遠くなるほどの長い年月を過ごしてきたのだ。

そんな、落とし子が自分の腕の中にいる。

少し力を込めただけで折れてしまいそうほど小さな存在。

自分と同じ色を有した小さな少女。

出会ってたった数刻。

されど、その時間だけでシュヘンベルクはもう、己の腕の中にいる
少女を手放せないと思った。

恐れる事なく自分をまっすぐ見つめる瞳も。

媚びる事のない態度も。

――美しいと、思った。

強くて、気高いと思った。

心惹かれるなにかが、少女にはあつた。

朱里が落とし子だからというのを抜きにしても、朱里には魅力があ
つた。

だからこんなにも、惹かれる。

今まで感じた事のない感情がぐるぐると渦巻いているのを感じつつ、
シュヘンベルクはそつと朱里を離す。

「いきなりどうしたの？アーシュ」

「…ああ、なんでもない。」

「そう？」

未だ長い前髪で隠れたままの朱里の瞳が見えない事が少しばかり勿体ないとおもった。

だから、そつと朱里の前髪を持ち上げる。

はつきりとした二重に、まるでこの魔界の空のように一つの曇りもない澄んだ黒い瞳。

初めて出会った、自分と同じ色を有する存在。

魔力の強さは、髪と瞳の色を見れば直ぐにわかる。

髪も瞳も黒に近ければ近いほど有する魔力は多く、白に近ければ近いほど有する魔力は少ない。

白に近い色を持っているのは、城下に住む一般魔族達に多く見られる。

サーシエスは髪の色こそ黄緑で白に近いが、瞳は濃い紫だ。

魔力というのは、髪にあると一般的にはよく言われているが、実は瞳にある。

故に、髪は白に近い色をしていても、瞳の色が濃ければ相当の魔力持ちであると言われている。

事実、サーシエスは魔王に大分差があるものの、城内では相当の魔力持ちだ。

強さの順位で言うならば、両方共に黒＞両方ともに黒に近い＞瞳は黒に近い＞どちらかが濃い＞どちらか薄い、といった形になる。

純粹な魔族でも両方ともに黒に近い色を持っているのは、たった2人のみ。

両方ともに黒を有するのは、魔王シュヘンベルク只一人。だったのだ。――朱里が現れるまでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7860v/>

エデンの林檎

2011年10月9日07時53分発行